



祐介の目

No.143

大田祐介（福山市議会議員）

武田教諭は「昔の人々の生活や社会を知ることにより、それがどう変化してどこへ向かうのかを知って初めて未来の予測を立てることができる。考古学は未来の学問である」と市民・開発業者

古代への情熱

者・学会・千葉市役所を説得して回ったそうだ。

これは子供の頃から夢見たトロイ遺跡の発掘をして考古学史上、劇的な成功を収めたシュリーマンの自伝のタイトルである。私も子供の頃にかしよいち氏の日本発掘物語全集を読破し、将来は考古学者を夢見ていた。特に「貝塚のひみつを探る」という本は思い出深く、読後40年を経てもやっと日本考古学発祥の地と言われる品川の大森貝塚遺跡庭園を訪問した。古代のロマンを感じるに相応しい公園となっており、案内板によれば貝塚を発見したモース博士は出土した土器の模様をこのmarkと呼び、日本語では縄文と訳された。これが縄文時代の名前の由来である。

先日は千葉市の加曾利貝塚を訪問した。この貝塚は高度経済成長期に開発により消滅の危機に陥った。しかし、県立千葉高教諭の武田宗久氏が貝塚の重要性を訴え、保存運動を展開して行政を動かした。

対して福山市の貝塚は軒並み開発により失われてしまった。看板等がその跡地を示すのみとなっているが、すべての貝塚を自転車で回った覚えがあり、唯一柳津の馬取貝塚がその一部を残していた。私の考古学熱には母も困ったように、母校の岡山大学の近藤義郎先生に手紙を書いてくれた。近藤先生は月の輪古墳などを発掘した日本考古学の権威であり、私が近藤先生と文通した手紙は大切に保管している。母がエベレストに登頂した際の登山隊の隊長が近藤先生の甥の謙司氏であったのも必然ではなかったか。

市議会議員になっても古代への情熱は冷めることなく、駅家の二子塚古墳や赤坂のイコーカ山古墳、神辺の御領古墳群の発掘・保存の問題等、様々議論し提案してきた。未来の考古学者のために自分の夢を後世に託したつもりだ。より良い未来に期待したい。